

喜多院は西武線本川越駅から、徒歩で、ほぼ十分ほどのところにある。三光町の左知子の家からは三十分足らず、小さい時、父や母に手を引かれてよくこの境内には足を踏み入れた。

午後のことで銅板葺きの屋根が鈍い褪色（たいしょく）のなかにある。天台宗の古刹（こさつ）で天長七年に慈覚大師円仁により創建された勅願所で国宝に指定されている。

元久六年、天文六年の二度の兵火で炎上し、更に寛永十五年の川越大火で堂宇（どうう）はすべて焼失、現在の建物は三代將軍家光によって再興された。

土曜日の午後のもので、左知子は家庭教師をしている少年の家からの帰途、ここの境内を通った。風は爽やかで、木陰のベンチに人々が集っていた。東京などからも沢山の人がやって来るほどの名所で、それなりの名のある寺院であった。

五百羅漢の石仏が並んだ拝観所の木戸前で、この日、左知子は、思いがけず筑波学園時代の友人に会った。

それも二人連れで、男と女、仲の良いところを見せつけられた。

斉木和彦と、新井美里で、かつては、左知子はこの二人の仲を割いたことがあった。

「左知子、わたしたちもうこんな関係になっちゃったの」

ぱったり顔を合わせた時、美里が無邪気な口調で言い放った。言われなくともわかっていた。

美里の下腹はもう臨月なのか大きく前にせり出していた。

「まあ、いろいろあったけどさ。もうすぐぼくも一児のパパってわけだ」

和彦は照れ臭いのか、縁なし眼鏡に手をやりながら、言い訳がましく言った。

「なあーんだあ。ばかみたい」と左知子。

「これだもんな。相変らずだ」

筑波学園時代のことを思い出してか、和彦は少しとまどったふうのことを言った。

苦手な女を前にした顔つきであった。

「ね、久し振りじゃない。どつかで一休みしていいこうよ」

美里は組んだ腕のまま、和彦に甘えた。

左知子には、わざとらしい仕種に見えた。

境内の隅に茶店があった。

氷と染め抜かれた布切れが少し風に揺れていた。店前にあるベンチで三人は腰を落着けた。

「予定日はもうそろそろなのよ。実家の母に面倒みて貰うことになるから、いつそのこと、引越してちやえつてことになってえ。先週の日曜日に川越に舞い戻って来たの」

「まるで養子みたいになっちゃった」

「やれやれね。和彦も落着くところに落着いちやつたってわけだあ」

「それを言われると辛いよ」

「なによ、和彦、辛いつて顔じゃないわよ」

左知子は昔のままに、和彦と呼び捨てにした。美里が嫌な顔をする。

「わたし、かき氷にしようかな」「だめだよ。お腹の中の赤ちゃんによくないよ」と、二人が会話を交わす。

「わたしは真赤ないちごシャーベット」注文を訊きに来た店の女に、左知子が先ず告げた。

「ね、氷を食べたからってお腹の中の赤ちゃん、冷たくなっちゃうわけじゃないのにな」

「嫌なことを言うなあ」

「わたしは変ってはいないの」

左知子と和彦の会話に、美里が割って入った。拗ねた顔になる。

「わたし、なんにもいらない」

「これだもんな。おばさん、ぼくたちは焼きだんご、二本ずつね」

三人の顔を見くらべている中年女に気兼ねして和彦がやっと注文を出した。

左知子と美里は川越の県立女子高では同級生同士であった。筑波学園都市に三つある大学の一つに、二人揃って現役で入った。

女子高の時に仲がよかったわけではないのだが、同窓生の誼（よし）みで付き合うようになった。美里の実家は地元では知られた不動産会社で、近頃の東上線の発展と共に大きくなった。

和彦は東京出身だったが、美里の実家が一人娘のために邸内に離れを新築したので、この川越の街に住むことになったのであった。

「ねえ、わたしの舌、もう真赤でしょ？」

おどけてみせ左知子は、あかんべえーをした。人工着色そのままの赤い舌をしていた。

二人はちらと横眼で見る。

「こう言うのを、人を喰ったみたいって言うのよね」

「うまい、うまい」

調子を合わせたが、和彦は余りのつているふうではなかった。八月に入ったばかり、ほんとうならぎらつくような夏の陽が注いでいるはずなのに、季節がずれていた。

海水浴シーズンの真盛りなのに、少し涼しささえあるこの気候では明日の日曜日、かき入れ時の海水浴場も例年より人出が少ないと思われた。

居心地悪そうに二人が早々に席を立ったので、七、八分ほどしか話はしなかった。

それでも美里は別れ際に、

「左知子、赤ちゃん生れたら遊びにお出ですよ」

と、声を掛けていった。

「うん」左知子の背に語りかけられたので、後向きのまま、左知子は返事をし、右手を上げて「バイバイ」をした。二人が見ていたかどうかは知らない。もう左知子はすたすたと歩き始めていた。

ケヤキの大樹が地上にうつすらとした影を投げている。薄曇りで、雲間を通してわずかに夏の陽が届いていた。翳っていた地を這ってゆつくりと午後の陽射しが戻って来る。

銅板葺きの堂宇の屋根も少し輝やきを増した。

鳩が群れていて、左知子の一步に俄かに空が騒がしくなった。やはり、邪慳な歩みになっていたのであった。二抱えもあろうかと思われる古木の幹にロープが張り巡らされており、所狭しと願懸けの結び文がぶら下っていた。

左知子は通りすがりにちらと、その願懸けの文を見やった。どれも男と女の思いが懸けられているに違いなかった。

慈恵堂の正面の板壁には、ここを通る人は手を合わせてお詣り下さい。よい一日がおくれます。と墨書された立看板が置かれていた。

ただ視線をくれただけで佐知子は境内を横切った。時刻はもう午後二時を過ぎていた

家に帰り着くと、梯吉の怒りの声が先ず左知子に向けられた。

「おい、どういう了見なんだ。まったく、昼めしも喰わせてもらえん。小便も垂れ流しだあ。いいかげんにしろっ、えっ」

風通しの悪い部屋に入ると、夏の暑さだけがこもっていた。扇風機が回っていたが、どこか、かったるそうに見えた。

相変らずテレビはつけっ放しになっている。

歌謡番組はホテルのプールから中継されていて水着姿のアイドル歌手がマイクを手にしていた。

はち切れんばかりの若い肉体である。

左知子は、かたかたと鳴る古い箆笥の把手を引き、きちんと折り畳まれた晒（さら）しの布を取り出す。梯吉のために、白いおしめの布がそこには用意されていたのだ。いつだって左知子は眼をそむけてきた。

二年近く寝たきりの五十六歳の男の下半身はすっかり痩せ衰え、腰骨が露わになっている。

寛骨（かんこつ）のとがりは特に痛々しい。

生暖い小便のアンモニア臭がおむつを外すと一気に拡散され嫌な匂いを放った。

指先に人間の体温を持ったおしめが触れた。

なによりも萎えた性器のおぞましさに左知子は息を詰めた。

妙にそこだけ白っぽく見えるのも嫌だった。

ただ、垂れ流す機能のためだけにそれは股間に置かれている。

「たまにはちゃんとしてくれよ。また痒い皮膚病にでもなったらかなわんからなあ」

梯吉は首をもたげてみせた。股間に上半身を埋

めるようにしている左知子にそう命じた。

風呂に入れるのはおおごとで、家を出てしまった芳枝の手がなくなつてからは体を拭いてやるだけになった。台所に立ち、洗面器に水を満して戻る。濡れたタオルできれいにしてやらないとかぶれることがあった。

たぶん、感覚は鈍いはずなのに梯吉は左知子の指が自分の性器に触れることを愉しみにしているようなところがあつた。

二本の指で、そつと、へばりついたようになっている肉の一部を孤みとる。

左知子の視線の先きを一人の男が見ている。

その眼付きのことは前々から知っていた。

が、努めて左知子は無表情を装つた。

「いいかげんじゃだめだぞ。なあ、考えてみれば左知子は父さんのその可愛い先つぽから生れ出たようなものだぞ。大事にしてもらわんと割りが合わんなあ……」

「生んでもらつて迷惑つてこともあるのに」

「なんだあ。父さんの看病で嫁にも行けんという意味か」

「さあ……」

もうそれ以上のことは言わなかつた。

「腹がへつたよ。腹が、なあ、冷やし中華にしてくれ。氷で冷たくしてな」

あとは呆けたみたいに、また、テレビの画面に見入る。カメラワークは下から上にと、水着姿の女性歌手の肢態を追っていた。

台所に立った時、半分開いた窓の向うの塀越しに隣家の夫婦者の姿が見えた。

低い板塀は申し訳程度の造りで、破れたままの塀の隙間からは子供のいない男と女の痴態が望めた。太り気味の女はスリッパ一枚のだらしない姿

であった。昼の日中なのに、男が剥き出しになった女の太腿に手を這わせ、内へと手指をすべり込ませた。

左知子が台所の窓の前に立つのを男は待っていたのかも知れない。タイミングがよすぎるのであった。女が下卑た笑い声を出し、男の手を払いのけた。頭に来たので、左知子はぴしゃりっと窓を閉めた。

左知子は手も洗わずに冷蔵庫から一本の胡瓜を取しり出す。残りの一本だったので生気がなく凋（しぼ）んでいた。まるで父の股間にあったものと同じだと思った。

狙いをつけ、三つに寸断する。

解剖するつもりで包丁を入れ、刻む。乱暴な手付きになっていた。腹が立った。怒りを一本の凋んだ胡瓜に向け、一人前の冷やし中華そばが出来上るまで、とうとう左知子は手を洗わなかった。

そのくせ、父の前に供したあと、石鹸を使って丹念に指先まで洗った。

その動作ばかりはのろのろとしたものだった。

## 2

和彦と美里に再会した四日後に、左知子のところに電話があった。

「生れたよ。それで美里がさ、きみに知らせてくれって」

「へえーっ。それで五体満足？」

「あたりまえさ。ぼくたちの子供だもの」

「わかった。わかった。どちらかと言えば和彦は、品行方正なほうだものね」

「まあ、ね」

この時、左知子は、これから産院に行くと言う

和彦と一緒に祝いに行くと言った。

待合わせの場所は市役所近くの路地を入った、時の鐘の櫓（やぐら）門の前にした。城下街川越の一つの象徴ともされる時の鐘は、蔵造りの商家とともに、古くから人々に親しまれてきた。

三芳野名勝図絵にも多賀町、時鳴鐘の名で櫓の絵が残されている。少し渋ったが和彦は、左知子の強引さに負けて産院とは遠回りになるのに、時の鐘の下で会うことを約した。

午後二時、この日は夏らしい暑さで、きれいに青空が抜けていた。三十度は越していなかったが、かなり肌を灼く陽射しは強かった。

左知子の体調もよかった。

あの嫌な下腹の痛みを感じる事がなかったの  
で、足取りも軽かった。

和彦と二人だけで会うことに心も弾んだ。

美里は知らないことだったが、筑波学園都市では二人は危うい関係に成りかけたこともあった。

左知子の気持の中には昔の恋人と会うような浮き立った思いもあったのである。

約束の午後二時数分前に左知子は火見櫓の門の下に立つ。余り履いたことはないのに、この日はスカートを身につけた。白い半袖の、ブラウスに薄い紫色のスカートの装いであった。

しばらく待たされた。

三層の屋根庇が下から仰ぐと鐘楼から張り出している。櫓の高さは十六メートル余もあり、奈良の大仏様より六センチも高い。

てっぺんの屋根囲いの下が鐘撞堂で、地上からは釣り鐘はよくは見えない。奥に社と、お稲荷様を祀った祠があり、いくつかのベンチが狭い場所には置かれている。

鐘楼を見上げると、暗い庇の端から何羽かの鳩



が顔を覗かせていた。

強い陽射しが一面には当たっているのだが、翳の部分には際立った暗さが映じていた。光と翳の構図がきつちりと描き分けられていたのだ。

待っていると、ほどなく、和彦が姿を現わした。初めての場所らしく眼で探りながら、こちらに近付いて来た。近眼なので少し足元が覚束（おぼつか）なくも見えた。

「やあ、待った？」

「それほどでもないわ」

「凄い高さだな」

「あら、来たことはないの？」

「ああ、ぼくは初めてさ」

櫓門（やぐらもん）の中へと和彦を招じ入れる。余りに高いので和彦は体を後に倒すようにし、時の鐘の塔を仰ぎ見た。

「あの鐘はね、もう三百年も川越の街を見下ろして来たのよ。風向きのいい時は六里から七里も鳴り響いたほどの名鐘だったんだって。ああ、そう、いまはね、朝の六時に正午、それに午後の三時と六時の四回、自動装置が働らいて刻（とき）を告げることになっているの」

高い塔の背面を風が一気に駆け降りて来た。一陣の涼しい風がもたらされる。

「ね、少しはいいんでしょう。二人でコーヒーブレイクってのはどう？」

「ああ、いいねえ、コーヒーがのみたくなっていたんだ」

和彦はやさしいところを示してみせた。モカと記された小さな喫茶店を見つけた。

二人はそこに入ることにした。

喫茶店の前の道路は工事中で、左知子はその途次、掘り返された道路の石塊に躓（つまず）きよ

ろけた。咄嗟に、和彦が肩のあたりに手を差し伸べてくれた。ぎゅっと握られた肩口の痛さに、何か新鮮な感覚を持った。喫茶店で向かい合う。

「それにしてもまた会うとはなあ。妙な気持だよ。これ」

「いいじゃないの。たぶんそういう巡り合わせだったのよ」

「それは少し意味がありすぎるよ」

「それじゃあ、そういうストーリーイってことにしておいたら」

恨めしそうな眼になっていた。

和彦はまともに見詰められ、とまどいの表情を見せた。

「ね、わたしはね、あなたに川越の街のことよく教えてあげようと思つてこの前図書館に行つて来たのよ。元は同じ史学研究会のメンバー、ねえ、和彦、あなた中学校の社会科教師、少し興味を持たなくちゃね」

恩着せがましく言い、左知子は小さたサイドバッグの中から四つ折りにした紙片を取り出した。

ていねいにテーブルの上に広げてからコピーの文字を読み出した。まるで誦（そらん）じているような名調子であった。

「…去（さる） 十七日の夜は同地も西北の風烈しく砂塵を飛ばす程なりしに、たまたま南町四百二十九番地皆川勝五郎方灰部屋より出火せりと伝ふる間もなく火焰は忽（たちま）ち同家本宅に燃え移りしが、近日の天気続きにて屋根板は宛（さな）が）らにコツパの如く乾き切たる折柄とて、火勢は恰（あたか）も落ち葉を焼くが如く、見る見る一面に拡がりたり。右火元の近傍は同町にても殊に目貫と称せらるる場所なれば、近傍は相応の土蔵を以て取囲まれあり。去れば当夜若し風力の斯

(か) くまで烈しからずば、大抵は此一部のみにて鎮火すべき筈なりしに、生憎(あいにく)風のために火は悪火とて、土蔵と土蔵の間より抜け出て南町の方へ燃出したるより、同町は忽ち火熔を以て包まるるに至れり。此処より火力次第に猛烈となりて、瞬く間に全町を焼払はんず勢となりしにぞ……」

眼の前の和彦の意向などまるで関係ないと言つた口ぶりで、佐知子はしゃべつた。

和彦は木椅子に背をもたせ、少し距離をおくようにして左知子を見ていた。

尖つた顎に小さくて低い鼻、細い眼腫れぼったい。薄い唇にも紅はさしていない。

ほんとうに和彦は嫌な気がした。

「どう？面白かつた？」

「ああ、とても名調子だった。よくそんな一文があつたものだね」

「まだあるんだけど、今日はこれくらいしておくわ。楽しみはあとに取っておけていうでしょう」

和彦が胸ポケットからハイライトを取り出したら、左知子がさつと喫茶店のマッチを擦つた。

たばこを口にくわえたまま、彼は顔を前につき出した。タイミングは合っていたのに、左知子がふつと息を吹きかけ、マッチの火を消した。

「すぐ火を付けちゃあもつたいないでしょ」

二本目でも同じ遊びをやる。

「これだから。いいさ、自分で火ぐらいつけるよ」

「ね、美里は子供を生んじやつたわけだから、当分だめつてことでしょ？」

「なにが……」

「やーね。四十日間はなにしちやだめつてそんな

こと常識じゃない」

「ああ、そういうことか」

「どう？火遊び再開、あわてずに、二人して、やりましょうよ」

「……………」

「さあ、火を付けたげる」

やっと三本目のマッチがたばこに火を付けた。

一服、深く吸い込んでから、

「再開って、前になにかあったようなこと言うんだものな。こわい、こわい」と、和彦は答えた。

「なに言ってるの、少しはあったほうだと思うけどな」

「そういう話はなしにしようよ」

「あら、美里に言い付けられるのが恐いの？」

「でもないさ」

「あなた、このわたしの唇を初めて奪った男よ。覚えてる？」

「おいおい、もう止せよ」

ウエイトレスが和彦のほうを見た。左知子は一向に気に掛けるふうもない。

「今日のところは先ず話題を変えようよ」

逃げの手を打つ。

「あなたへのお祝い、ね、ねえ、なにがいい」

「そんなのいいさ」

「二世誕生でしょ。胸を張らなくちゃ。そうね、和彦のために毛糸のお手製マフラーでも編んであげましょうか？」

「なに言ってるんだ。赤ちゃんのためのお祝いだよ」

「馬鹿ね、子供を生ませたのはあなたじゃない。わたしは和彦にお祝いの品を上げたいのお。それにね、この川越の街、冬はびゅうびゅう風が吹いて結構寒いよ。知らないの？」

「……」

「ほ、困った顔してるう。これって、意地悪してるんじゃないのよ。わたしのほんとうの気持なんだから」

まじまじと和彦は左知子の顔を見た。

それからわざとらしく腕時計の針を読んだ。

「もう、赤ちゃんの顔を見たくなくなったの？男親は女の子に弱いつて言うものね」

「まだそんな気にはなれないよ」

「わたし、その女の子の名前考えてあげましょうか」

「いいさ。美里の両親がさ。姓名占いに凝ってるもんだから」

そこで左知子は声を立てて笑った。

「馬っ鹿みたい。冗談よ。和彦はすぐにマジになるんだから」

もう一度腕時計の針をたしかめてから和彦のほうが先に席を立った。喫茶店を出る。

表通りで少し立話をする。

「また二人つきりで会いましょ。わたし、和彦に少しばかり貸しがあるような気がするんだ」

「貸しか……」

和彦も思い当るふしがあるような顔になった。

二年前の男と女のちよつとした擦れ違いのことを左知子は言っているのだった。あとは気まずそうに黙って歩いた。

バス停のところまで歩くことにする。

その時、午後三時になったのか、時の鐘がとつぜんのこと稼動した。

ごおおーん…。

五十メートルは離れていない距離だったので耳元が震えた。表通りを走る車の音に邪魔されたが、かなり大きな音色だった。

「三時か」

と和彦は言い、また所在なげに腕時計を見た。「わたし、赤ちゃんは見に行かないことにするわ。気が変わったの」

呆気にとられたふうに左知子の顔を一瞬見返したが、和彦はすぐに安堵した顔になった。余計なことでも口にされるよりはましだった。

「近いうちに電話をするからね。ああ、そうそう、マフラーの色はわたしにまかせる？」

「いいよ。ぼくは。まだ、夏なんだし」  
「なに言ってるの。わたしはもうその気になってるんだから」

もう、左知子は踵（きびす）を返し、蔵造りの商家の角を曲がっていた。なにか素軽い足取りに見えた。和彦だけが立ちつくしていた。

3

左知子は生活保護の金だけでは喰って行けないので、家庭教師の仕事を引き受けていた。

休学中とは言え、一応は国立大学の教育学部の学生だったのだから、人に教えることぐらいは出来た。

高校の時の先生の世話で、高校受験を目指す中学二年生の男子生徒を受け持った。

場所は喜多院の近くで小仙波町にあった。家業は医院なので、両親がことのほか勉学に熱心だった。一週二回、二時間ずつで三万円もらった。左知子にとっては貴重な収入源だった。

葉崎樹里はいかにも医者の一息子といったふうの秀才型の少年だったが、それだけに気紛れで、偏狭なところもあった。

その日、葉崎家の少年の部屋で向い合った時、

樹里は開口一番、左知子を脅かした。

「ねえ、サッコ先生、もしかしたらクビになっちゃうかもよ」

「やーね、この前のこと、まだ、この家では大問題なの」

「そりゃ大問題さ。あいつが一番だなんて信じられないもんな」

夏休みの始まる前に、川越地区で有名進学塾主催の模擬ペーパーテストが行なわれた。

参加者五百余名中、樹里が「あいつ」と呼んだ羽郷圭介という名の少年が第一位になり、葉崎樹里は第二位で終わった。

あいにく、羽郷少年とは同じ小学校の出身で、家もそれほど離れていなかったから、葉崎少年の両親はそのことを大いに気にした。

その前のテストの時は樹里が川越地区では第一位であったのだ。この四月から左知子が特別に受け持った数学の成績が少し悪く、それが順位差になってあらわれたので両親は、左知子の先生ぶりを問題にしたのかも知れなかった。

「でも、ぼく、サッコ先生のことかばってやってもいいよ」

「へーえ、そんなことあなたに出来るの？」

「この前のこと、考えてくれたあ？」

「そうね、それがクビにならない条件だったら、少しは協力してあげてもいいわ」

この前のことというのは、樹里が部厚い解剖医学書を左知子に示し「一四三ページを開いてごらんよ」と、作為的なことを言ったことから端を発した。

父親の書齋から一時借用してきたカラー版の医学書を開いたページには、女性器の絵図が示されていた。その横には内臓器の赤色の勝った解剖図

もあつた。子宮や卵巣、それに膣道などの位置が一眼でわかる。左知子の病巣部の形もちゃんと示されていた。

「なに、これに興味大ありなの？」

別に左知子は動ずることはなかった。家庭医学書にだつてこの程度の図は挿入されている。

「ぼくは医者になるんだもの」

「それで、もう女性の体については勉強したわけ？」

「この頃、もやもやつとしてだめなんだよね」

「ねえね、この前の美人の女子大生にも同じことを言つたんでしょ」

「あいつ、自分で辞めたんだよ」

「解剖させろつて言つたの？」

「さわつただけで、きやつて言うんだもの。どうかしてるよ」

「やれやれ、ここに第二の実験対象者がいるつてわけだ」

左知子は少年のあやし方を心得ていた。

すぐにOKするのも嫌だつた。それでその時は気を持たせるようなことだけを言つた。

「いいわよ。でも、こういうことはよく考えてからね」

「なんだ。口ばつかりなんだね」

その時、樹里の母親が二階部屋へやつて来る足音がしたのでその話は途絶えた。

樹里は素早く解剖書を隠した。

二人とも、真面目な顔に戻つた。

樹里の母親は二人のためにアイスコーヒーを置いて行つた。口ばつかりなんだね、と言つた樹里は、もう気難しい少年になつていた。

神経質そうな顔に眉根を寄せ、大人の顔を無理に作つてみせた。帰り際にも何も言わなかつた。



それで、三日後に来てみたら、いきなり、クビにするとかしないとかの話になった。

模擬テストで二位に落ちたこと、それに性に目覚めた少年の気紛れさ、この二つの理由が、家庭教師を追いやるもってもらいたい動機となっていたのであった。

「それじゃ、なにを協力してあげようかな」

この日はちゃんと左知子は、少年の条件を受け入れる態度を見せた。樹里が答える前に、

「ね、樹里ぐらいの齡だと、そうね、女の人の乳房に憧れるってことあるんでしょ。お母さんのおっぱいのんで育ったんだものね」

と、ことばをかぶせた。

「もう初キスはすませたんだよ。ぼく」

「ああ、この前の女子大生？」

「誰れでもいいんじゃないか」

「どうせ、あつという間の初キスでしょ。それじやお姉さんが、先ずはほんとうのキスの味をプレゼントしようか。お出で」

計算高くて悪智恵の働らく少年に見えたが、樹里の唇の位置と合わせた。最初は、ちゅっ、と頬にキスをしてやり、それから同じ調子で樹里の唇に触れた。一度離す。

至近距離に二つの唇があった。

次はゆっくりと、全体をくつつけるようにして唇を合わせた。映画だと二つの魂は相寄ることになるのだが、ただ樹里は棒のように背を真直ぐに伸ばしたままだった。

「この子、口ほどでもないんだわ」と左知子はこの純情ぶりのことを考えた。

初キスをすませたと言うのは嘘だと思った。

続けて二度、三度と唇を合わせてやった。

樹里は初キスに似た感覚を感受している最中だ

ったが、なぜだか、左知子にはそれほど快よさはなかった。稚気なあそびでしかなかったせいもあるが、もう一つ気が乗らなかった。

純情だけかと思っていた樹里は結構あつかましくて、左知子の木綿シャツの胸に右手が伸びた。十五歳の少年らしく、樹里は緊張した面持ちになった。

「映画のように美しくね」

クビ<sup>①</sup>になったらかなわれないと思つて左知子は協力する気になったのだが、いざキスする段になつて少年の初々しさに、禁断の木の実に手を付ける気持になつた。映画のように美しくね<sup>②</sup>、というのは左知子の照れから発したことばであつた。

年上らしく冷静さを装つたが、二十三歳にもなつてキスはまだこれで二度目、悪ぶつてもいたが左知子だつて緊張していた。

「眼を閉じて、向い合うのよ」

こうなると樹里は従順であつた。

正座するような恰好で坐り、本当に眼を閉じた。樹里の背丈は一メートル七十、坐つていたので極端な差はなかったが、小柄な左知子のことだからやはり、大人と子供の違いぐらひはあつた。

左知子は膝を折り、少し伸び上げるようにして、樹子の左の乳房を着衣の上から掘み取つていた。

「いいわ、乳房に触れさせてあげる。でもしばらくはサービスはここまで。それ以上のことはだめよ。そうね、樹里の成績がもつともつとよくなつて念願の高校に入ったら、樹里の童貞、わたしが頂いちゃおうかな」

ちゃんと眼の前に人参をぶら下げてみせた。受験戦争なんて、サラブレッドの調教のようなものだった。馬のつもりで鞭を入れてやれば鼻差だつて抜けて出る。左知子は本気半分、冗談半分で、

樹里に体を与えてやる約束をした。

「ここから手を入れてごらん」

左知子は樹里の手をとり、木綿シャツの下に手を入れさせた。ブラジャーは付けていなかった。半分ほど木綿シャツをめくってみせた。

樹里の手はヘソの下あたりを撫でるようにし、下から入って来た。触れ方を知らないから、いきなり乳房を握られた。

「痛い！痛い……もつとそつとよ」

指はほどかれたが、今度は右左に右手が動き、乳房が交互にこすられた。乳房のかたちを樹里は指先でたしかめようとしているかに思えた。

「こんなの脱げばいいのに！」

綿シャツを剥がしに掛った。

「あつ、だめだめ！今日はここまでよ」

慌てて裾部分を押さえる。意外と素直に、樹里は言うことを聞いた。

「サツコ先生の、ぺちやパイだもの、つまんないや」

いたずらをした少年の顔になっていた。

「言ってくれるわね。ぺちやパイの方が感度が高いの知らないの」

「じゃあ、感じた？」

「こんなのガキのあそびなのオ」

二人はちよっぴり心を許し合っていた。

「サツコ先生、いろんなこと、ぼく教えて欲しいんだあ」

「それじゃ、産婦人科のお医者さんにでもなったら」

「ばーか、うちの病院は内科、外科が専門なんだから」

「そう、わたし、樹里先生に診察してもらおうと思っただのに」

勉強そのけで、二人はおしゃべりをしていた。姉と弟のようにも見えた。帰ろうとした時、樹里の母親に呼び止められ、左知子は、数学教科のカリキュラムを今度来る時に出すと言われた。

「学習方法が悪いならためないといけないですよ。目標の高校に入るだけが目的じゃありませんからね。そのためには今度の模試、一番にならないと困るのよ」

暗に、家庭教師を代えるかも知れないと母親はほのめかした。

次に訪れた時、左知子は、樹里少年に別の遊びを教えた。ちよつと見当外れのこと、初めは樹里は変な顔をした。

「あなたが勉強するより、ほら羽郷ってライバルの子、わたしたちが呪いをかけて殺しちゃうってのはどう？要するにあの子が居なけりゃあいいんですよ」

「あいつ、陸上競技の選手でさ。百メートルを十秒切るっていうもの。体も頭もよくてさ、キョーイだよ」

「それじゃ、その子のうちに大きな凹レンズを向けてえ、太陽光線で自然発火させて、家ごと燃しちゃえばあ？」

「ばーか、ぼく忙しいんだからさ。そんな話につき合ってられないよ」

「火を付けちゃえ、火を付けちゃえ」

「困っちゃうよな。サッコ先生これだもん」

樹里は片手を頭の上にかざし、ぐるぐるパー、だという真似をしてみせた。

「何でもオオマジメ、わたし、呪いの人形持って来たんだからね」

左知子は本当に妙な皮製の人形を持ち出した。三角頭の人形で、平べったい形をしていた。一枚

皮の剥（く）り抜き人形であった。

長さは十センチほどある。

顔には彩色が施されていて、眼と口の回りが赤と黒で隈取られていた。胴体の部分は赤、青、黄の原色のぎざぎざ模様が入っていた。

「これはね、メキシコの人から貰ったの。太陽神の化身で、黒ミサの時に、魂を入れて貰ってね、太陽の子になったのよ。太陽が頭の真上に来る十二時ちようどに、真南に向けて吊るしておくよね、呪いをかけられた人の家に火が移るのよ。羽郷圭介、お前なんか呪われて焼き殺されるって願いを込めれば、それでいいの」

「一人殺したって、競争相手はさ。まだまだ一杯いるのに」

「何言ってるの。まず眼の前の敵よ。これ、わたしのクビがつながるかどうかの大事な話なんだから」

「それなら大丈夫だって。ねえ、今日もサッコ先生、サービスしてくれるう？」

「サービスかあ。どう？今日はおっぱい吸わせてあげましようか。でも、ちゃんとこの呪いの人形、夏の間はその窓の所にでも吊るしておいて。

呪いの文句も毎日十二時になるとちゃんと一言なくちやあ。やれる？」

「ああ、忘れなきやあね」

「いい、羽郷圭介くたばれ！そういう思いがないとね、勉強の効果も上がらないのよ。集中中心をつけるのにもこれ役立つことよ」

「わかったよ。ね、もういいじゃない」

樹里は催促した。

「ほんと、赤ちゃんなんだから」

左知子はこの前のように樹里を正座させてから、顔のあたりに胸を押しつけ、Tシャツの胸をは

だけた。

「やっぼり、ぺちやパイだあ」

痩せた胸は男のようだから、あまり樹里にとっては感激の場面でもなかった。

両手でシャツをたくし上げ、胸だけ突き出した左知子の恰好もおよそ色っぽくはなかった。

樹里は手では触れず、口先だけを突き出した。

乳首を含んだ。やっぼり加減というものを知らないから、強く吸われ、痛かった。

「あー、サッコ先生のシヨツパイよ」

「夏は誰れでも汗をかくの。十五にもなっておっぱいのんでいるのは樹里ぐらいよ」

ちよつと吸ってみたが、興味を失くして、樹里は止めてしまった。

「ね、本当に自分でやるの頭に悪いの？」

「なに？自慰のこと？」

「三日に一度よってお母さんが言ったんだ」

「へえー、樹里はセックス管理までされてるの」

「この前、風呂場で見つかったやつさ」

「二、一でだいじょうぶよ。貯まってるほうがよっぽど頭に悪いんだって」

「そうか。感じる時が出したいとき、って言うもんね」

「はは、きみらの学校でそういうのが流行ってるの」

「まあね」

この日も、数学の学習書は開かれたままで、左知子は一向に勉強をすすめる気はないようであった。二階の勉強部屋の向うは、喜多院の森になっていた。じいじいじいと油ゼミが鳴いていた。

夏の陽射しが森の空の上ではねている。

だが、樹々はひっそりとした暗さをつらねていた。ここの森はかなり深い。

「ね、これほんとうにほんとうの話よ」

左知子はそう言い、さつき口にした呪いの人形を軒端に行き、吊るした。

「こちらが真南、こうしておくど、ほんとうにあいつの家燃えちゃうんだあ」

「ほんきー？」

「いいじゃない。家の一軒や二軒、燃えたところで」

昂然と胸を張ってみせた。相変らず、樹里は果れ顔で、左知子の横顔を見ていた。

4

翌日、電話が掛かってきたので、佐知子が受話器をとつたら、駅前交番からだった。

「この前、ここの交番で調書をとった松山俊江さんの自転車の事故、桑原源吉という老人の申し出で、まだあなたが病院の費用を払ってないってんで、電話したんだがね。今、ここに、桑原さんが来ておられて、それで、色々事情はあると思うけど、被害者は現に病院には行っているわけだから、ちゃんと、払ってあげたほうがいいと思うんだがね」

「はあ、二、三日うちに払おうと思っていたんですけど」

「桑原さんが言うにはあなたに誠意がないとご立腹のようだし」

「でも松山俊江さんはどうなさったんですか」

「実家にもどっていて川越には今いないが、アパートはそのままですね。交番で責任持って金は先方に届けることになっている。今からでも、桑原さんはそちらに行くと言っている。それで、交番の方に桑原さんは金は届けて下さることになってい

るんだ」

「わかりました。そういうことなら、わたしが交番に持って行きます。その桑原さんて人、わたしの家に嫌がらせの電話ばかりして来て、わたしも迷惑しているんです」

「ははあ、そういうことなら、こちらへ、直接に持って来なさい」

この電話があった日の翌日に、左知子は、金を持って川越市駅前の交番を訪ねた。

電話の主の三十一、二歳の年恰好の警官が金は受け取った。

「あの老人はね、この前は自転車置場で、置き引きの現行犯を発見してね、その前はこのへんを荒らしていた自転車泥棒を捕まえたんだよ」

「ああ、そうですか」

腰を据えて話をされそうだったので、左知子は事務的にことをすませ、交番を出た。

脅迫文のことも頭にあつたので、老人の悪口なども告げてやろうと思っていたが止めた。それに、左知子にもやましいところはあつた。

警官に顔を覚えられるなど嫌なことだった。

ところが、この夜、また、あの桑原老人から電話が入った。

「払えるんだつたらどうしてすぐに払わんのかね。」

お巡りの言うことならきけて、わしの言うことはきけんというわけだ。お前さん、どういう了見をしておるのかね」

「あの、お金は払ったんですからもう電話はしないで下さい」

「わしは、お前に世の中の礼儀というものを教えているんだよ。電話代だったただじゃない。そのうち電話料金の請求書でも送ってやろうか」

「もうお説教は結構です」



左知子は頭に来て電話を切った。

が、また折り返しの感じで、りりんと電話が鳴った。とらずにいたら、執拗にいつまでも呼鈴は鳴り続けた。

「おい、うるさい！いいかげんにとつたらどうだ」  
事情を知らぬ梯吉が病床から怒鳴った。

仕様がなからまた受話器をとる。

「おい、勝手に切るな。切ったらまた電話するぞ。ともかく、このへんのことのでわしが知らぬことはないんだ。お前の父親が寝たきりで、乳繰り合った母親が男と逃げたことだつてわしは知っている」

「あの、もう夜の十二時ですから、それに父も寝ていますので「少しはしおらしいところもあるんだな。よし、今夜はお前の父親に免じておとなしく引き下つてやるよ」

やつと老人はおしゃべりを止めた。

ところが今度は左知子は梯吉に掴まった。

「うるさくて眠れやしない。いいから左知子、酒を持って来てくれ」

「だめよ、血圧だつて高いつてお医者さまに言われてるんだから」

「なあ、何の楽しみがあつて生きていると思つている？お前に酒を禁じられたら、もう生きていく気はしないよ。酒のんで死ぬんだつたらそれだつていい」

梯吉の酒好きは近所でも評判だった。

元気な時は酒乱気味で何度も警察沙汰になったことがある。言い出したらきかない父だった。

「どうせ、あの連中だろ。あいつらのこと考えただけで胸がむしゃくしゃする。こういう時は一杯のまなきや気がおさまらないだろ」

梯吉が酒をねだっているのに左知子は知らぬ顔をしていた。それで梯吉は電話の主を推量してな

お酒を催促した。この家の立退きを要求している不動産屋の連中と考えたようだった。

「おい、早くしろ！」とうとう梯吉は声を荒げた。こうなるともう駄々っ子でどうしようもない。左知子はコップに酒をみたし、梯吉の枕元に置いた。とたんに梯吉は機嫌がよくなった。

「父さんは考えているんだがな、どうせこの体だ。左知子が結婚したいって言うんなら、どこの病院だっつていい、父さんを預けておけば何とかなるだろ。なあ」

うつ伏せになり、コップ酒を口に持って行く時の梯吉はほんとうに嬉しそうだった。ちびりちびりと呑む。なめるように呑む様は、無邪気そのものだった。

六畳の間には床の間がある。違い棚があり、その棚の上にはホープの空箱を集めて作られたくすだまが飾られていた。その紙細工は暇にまかせて梯吉が作ったものだったが、それに眼が行った時、左知子は嫌な思いを持った。

母の芳枝が店の客にねだって持ち帰ったホープの空箱は、たった一つの母の奉仕行為をことさらに示しているように思えた。

沢山の男たちが手にした煙草の空箱はたしかに梯吉の無柳（ぶりょう）を慰めて来たのだが、今となつては無用のそれは飾り物であった。

「お前、知ってるか、夜になるとな、ねずみの奴がちよろちよろするんだ。この頃は飼ひ猫ばかりで、ねずみも獲らなくなっちゃった。そのうち、寝入った隙に、鼻の頭でも噛られるんじゃないかと思うと、夜もおちおち眠れんよ」

左知子は隣室に下っていたが嫌な気がした。父のことばに探りを入れた。もしかしたら夜出かけることを知っていて、父は左知子を牽制（けんせい）

い)しているのかも知れなかった。

古い街のことだから、左知子も何回かどぶねずみを見たことはある。流し台の下のパイプ孔から時折は顔をのぞかせる。ネズミ駆除用の殺鼠剤が各家庭に配布されるぐらいだから、ネズミがいることはたしかであった。

夜もおちおちと寝てられないと言った父の真意が凶りかねて、左知子はねずみの話には相槌を打たなかった。

早く眠ってしまえばいいのに、と思った。

左知子は、蒲団にもぐり込んでみせたが、とてものこと眠る気にはなれなかった。

嫌な街の匂いのが気になり始めていた。

なにより、あの桑原源吉という名の老人の存在が許せなかった。いかにもこの古いたたずまいの街に住みつくのに応わしい老人のように思えた。

もちろん、どこかで父の梯吉とも相通ずるものがあった。なにやら二人とも、〈眼〉だけが生きていると言った、人間の、いやらしさ加減<sup>ミ</sup>だけは、持ち合わせているかに思えた。

桑原源吉の月吉団地のあたりを一度うろうろしてみた。団地は新河岸川を越えた向うにありおよそ四十棟ほどの長方形の鉄筋住宅が建っていた。

どの棟なのかわからなかった。すでに頭の中には、赤い炎に包まれた老人の姿があったが、夜中にあの老人の住居を見つけ出す自信はなかった。

それに、警察との電話のやりとりの件もあったし、今夜の激した電話のあとの放火では、「わたしが放火犯人です」と自ら名乗り出るようなものだった。

何とかこの夜は、左知子は自分の気持を鎮めた。深夜放送のコメディ映画を見ながら梯吉はコップ一杯の酒をちびりちびりと呑んだ。

時折り、笑い声をあげる。

「おい、暑いから扇風機を回してくれ」

自分でだって扇風機ぐらいスイッチが入れられるのに梯吉は左知子に甘えていたのだった。

この頃ねふと変なことを考えることがある。

梯吉は生氣のない顔色をしているのに、どういう訳か、唇が口紅でも染しているように赤く見えることがあった。際立っていたのではない。

何となく唇だけが生き返ったように見えたりすることがあるのだつのだ。左知子は父の唇を舐める癖のせいかと思つた。

自分が紅を染さない女だから、そんな、些細なことが気になったのかも知れない。

珍らしくこの夜の梯吉は機嫌がよかつた。

夜遅くまで起きていた。

それで、とうとう左知子は、人の寝静まった街に出る機会を逸してしまった。